

盾 疑 応 答

質問 本造住宅の一部を防火的に改造したいと思いますが、壁の内部に貼って有効なものがあるでしょうか。(東京都世田ヶ谷区・市川三喜氏)

回答 内部を防火的に処理する簡単な方法は、難燃性の木毛セメント板を用いるか、更にこれに漆喰をぬるとよいのですが、これは室内からの発火に対しては有効で、壁と天井が難燃性になれば火事になる危険性は非常に少なくなります。この場合、建具の類ももちろん不燃材にするとか、せめて金属板で被覆する位のはしなければいけません。しかし、これでは他からの延焼を防ぐことはできません。完全な防火法としては独立した不燃材による骨格に、不燃材で外装及内装をやらなければなりません。これには當所で研究試作した金属パネル構造が好適で、木造の5割増の費用で防火的になります(建築・教授・星野昌一)

開 所 式 記 事

早朝來の時雨の去りやらぬ秋冷の11月12日當研究所の創立を祝う開所式典が舉行された。科學技術研究所の結集されたこの日、集つた當所の職員並びに學生1000名、參會した來賓300名が、共々に心ゆくまで生研の創立の喜びを分かち合つたのである。午後2時中央大講堂に一同會して式典が始められた。所長式辭、總長挨拶に續き來賓數名交々立つて祝辭を述べて式を終る。

3時半から中央大會議室に於て、來賓、主催者が合して祝賀披露會が行われ、同時に各教室に於ても教職員學生一體となつてなごやかな祝賀の宴が開かれた。講堂裏側の一室及び各教室には本所の代表的研究成果が展示せられ一般の展覽に供されたが、各部の展示題目は下記の通りで合計四十八點、中でも建築教室提供の12坪金屬住宅は人目を引いた。開所披露行事は翌13日も引續いて

開 所 式 展 示 研 究 事 項 一 覽 表

第1部 (基礎)	番 號	展 示 題 目	研 究 者 名
	1	試作靜電型電子顯微鏡とこれによる撮影寫眞	谷 安正
	2	腦波記錄裝置	糸川 英夫
	3	油擴散ポンプの Jet における流れ	富永 五郎
	4	光電池の研究	江口 雅彦
	5	微分解析機	山内 恭彦 三井田 純一 渡邊 勝
	6	振りの應力を石鹼膜の相似によつて測定する裝置	池田 健
	7	土の中の壓力を光電管を利用して測定する裝置	池田 健 富田 文治 森 大吉郎
	8	電氣捕鯨用電纜ロープの研究	平田 森三 鳥飼 安正
	9	捕鯨船の反跳防止裝置	平田 森三
	10	位相差顯微鏡	久保田 廣
	11	マグナス効果の風洞實驗	谷 一郎
第II部 (機械, 船舶)			
	1	齒車ポンプの研究	宮津 純
	2	逆張力引抜材の機械的性質	鈴木 弘
	3	耐蝕輕合金製救命艇の設計試作	山縣 昌夫
	4	波のある場合の境界層の剝離	田宮 眞
	5	蒸氣壓縮式蒸發裝置	兼重寬九郎
	6	空氣作動溫度制御裝置	高橋 安人
	7	暖房試驗室	藤 藤雄
	8	木材の蒸氣爆碎に關する研究	桑井 源禎
	9	芋澱粉工業の技術設備の研究	佐藤 敬夫
	10	精密ねじ切りに關する研究	小川 正義
	11	時計の性能に關する研究	大島康次郎 柴田 耕次
第III部 (電 氣)			
	1	變壓器燒損防止器と電流制限器	瀨藤 象二 潮 恒郎
	2	ビラス回路を應用した微小容量變化検出裝置	星合 正治 野村 民也
	3	車輛用電力ヒューズ	福田 節雄
	4	送電線閃絡點標定器	藤高周平・麻生忠雄 藤井新兵衛
	5	時計歩度の電氣的測定裝置	高木 昇
	6	高周波加熱による成型合板加工	齋藤 成文
	7	超音波探傷器	丹羽 登雄
	8	増幅器過渡特性直視裝置	森脇 義雄 内野 俊治
第IV部 (化學, 冶金)			
	1	油脂・蛋白質の生産並びに應用研究	増野實・淺原照三・金武克己・櫻内正・高木行雄・物瀬文之・その他研究生一同
	2	銀イオン濃度計	菊池眞一・坂口喜學・野崎弘
	3	製鹽副産物の利用に關する研究	岡 宗次郎
	4	アルギン酸に關する研究	高橋 武雄
	5	純銅粉の製造	小川 芳樹 松下幸雄・坂下大郎・森一美・鹽見純雄
	6	製鋼反應の研究	原 善四郎
	7	電解による純鐵粉の製造	武藤 義一
	8	迅速工業分析法の研究	金森九郎・八塚健夫・長井保一
	9	酸素製鐵の豫備實驗	江上 一郎 田村 啓治 片山 忠三
	10	鹽化マグネシウムの製造に關する研究	一色貞文・鍋木俊郎・古茂田敬一
	11	眞空熔解法の研究	
第V部 (構 築)			
	1	木コンクリートゲタの試作研究	福田 武雄 久保慶三郎
	2	建造物の基礎地盤調査	星 莖 和 三木五三郎
	3	地上寫眞測量と其應用に關する研究	丸安 隆和
	4	金屬住宅の試作	星野昌一・坪井善勝
	5	鐵筋コンクリート版の應剪抵抗	坪井 善勝
	6	本邦等デイグリーデー線圖と暖房	勝田 高司 田中 一彦 池邊 陽
	7	強化波型スレート板の試作と應用	

盾 疑 応 答

質問 本造住宅の一部を防火的に改造したいと思いますが、壁の内部に貼って有効なものがあるでしょうか。(東京都世田ヶ谷区・市川三喜氏)

回答 内部を防火的に処理する簡単な方法は、難燃性の木毛セメント板を用いるか、更にこれに漆喰をぬるとよいのですが、これは室内からの発火に対しては有効で、壁と天井が難燃性になれば火事になる危険性は非常に少なくなります。この場合、建具の類ももちろん不燃材にするとか、せめて金属板で被覆する位のはしなければいけません。しかし、これでは他からの延焼を防ぐことはできません。完全な防火法としては独立した不燃材による骨格に、不燃材で外装及内装をやらなければなりません。これには當所で研究試作した金属パネル構造が好適で、木造の5割増の費用で防火的になります(建築・教授・星野昌一)

開 所 式 記 事

早朝來の時雨の去りやらぬ秋冷の11月12日當研究所の創立を祝う開所式典が舉行された。科學技術研究所の結集されたこの日、集つた當所の職員並びに學生1000名、參會した來賓300名が、共々に心ゆくまで生研の創立の喜びを分かち合つたのである。午後2時中央大講堂に一同會して式典が始められた。所長式辭、總長挨拶に續き來賓數名交々立つて祝辭を述べて式を終る。3時半から中央大會議室に於て、來賓、主催者が合して祝賀披露會が行われ、同時に各教室に於ても教職員學生一體となつてなごやかな祝賀の宴が開かれた。講堂裏側の一室及び各教室には本所の代表的研究成果が展示せられ一般の展覽に供されたが、各部の展示題目は下記の通りで合計四十八點、中でも建築教室提供の12坪金屬住宅は人目を引いた。開所披露行事は翌13日も引續いて

開 所 式 展 示 研 究 事 項 一 覽 表

第1部 (基礎)	番 號	展 示 題 目	研 究 者 名
	1	試作靜電型電子顯微鏡とこれによる撮影寫眞	谷 安正
	2	腦波記錄裝置	糸川 英夫
	3	油擴散ポンプの Jet における流れ	富永 五郎
	4	光電池の研究	江口 雅彦
	5	微分解析機	山内 恭彦 三井田 純一 渡邊 勝
	6	捩りの應力を石鹼膜の相似によつて測定する裝置	池田 健
	7	土の中の壓力を光電管を利用して測定する裝置	池田 健 富田 文治 森 大吉郎
	8	電氣捕鯨用電纜ロープの研究	平田 森三 鳥飼 安正
	9	捕鯨船の反跳防止裝置	平田 森三
	10	位相差顯微鏡	久保田 廣
	11	マグナス効果の風洞實驗	谷 一郎
	第II部 (機械, 船舶)		
	1	齒車ポンプの研究	宮津 純
	2	逆張力引拔材の機械的性質	鈴木 弘
	3	耐蝕輕合金製救命艇の設計試作	山縣 昌夫
	4	波のある場合の境界層の剝離	田宮 眞
	5	蒸氣壓縮式蒸發裝置	兼重寬九郎
	6	空氣作動溫度制御裝置	高橋 安人
	7	暖房試驗室	藤 藤雄
	8	木材の蒸氣爆碎に關する研究	桑井 源禎
	9	芋澱粉工業の技術設備の研究	佐藤 敬夫
	10	精密ねじ切りに關する研究	小川 正義
	11	時計の性能に關する研究	大島康次郎 柴田 耕次
	第III部 (電 氣)		
	1	變壓器燒損防止器と電流制限器	瀨藤 象二 潮 恒郎
	2	ビラス回路を應用した微少容量變化検出裝置	星合 正治 野村 民也
	3	車輛用電力ヒューズ	福田 節雄
	4	送電線閃絡點標定器	藤高周平・麻生忠雄 藤井新兵衛
	5	時計歩度の電氣的測定裝置	高木 昇
	6	高周波加熱による成型合板加工	齋藤 成文
	7	超音波探傷器	丹羽 登雄
	8	増幅器過渡特性直視裝置	森脇 義雄 内野 俊治
	第IV部 (化學, 冶金)		
	1	油脂・蛋白質の生産並びに應用研究	増野實・淺原照三・金武克巳・櫻内正・高木行雄・物瀬文之・その他研究生一同
	2	銀イオン濃度計	菊池眞一・坂口喜學・野崎弘
	3	製鹽副産物の利用に關する研究	岡 宗次郎
	4	アルギン酸に關する研究	高橋 武雄
	5	純銅粉の製造	小川 芳樹
	6	製鋼反應の研究	松下幸雄・坂下大郎・森一美・鹽見純雄
	7	電解による純鐵粉の製造	原 善四郎
	8	迅速工業分析法の研究	武藤 義一
	9	酸素製鐵の豫備實驗	金森九郎・八塚健夫・長井保
	10	鹽化マグネシウムの製造に關する研究	江上 一郎 田村 啓治 片山 忠三
	11	眞空熔解法の研究	一色貞文・鍋木俊郎・古茂田敬一
	第V部 (構 築)		
	1	木コンクリートゲタの試作研究	福田 武雄 久保慶三郎
	2	建造物の基礎地盤調査	星 莖 和 三木五三郎
	3	地上寫眞測量と其應用に關する研究	丸安 隆和
	4	金屬住宅の試作	星野昌一・坪井善勝
	5	鐵筋コンクリート版の應剪抵抗	坪井 善勝
	6	本邦等デイグリーデー線圖と暖房	勝田 高司
	7	強化波型スレート板の試作と應用	田中 一彦 池邊 陽

行われ、特にこの日は卒業教員員の公務遂行の爲の盛の功勞者として、その家業が維持され各教員で暮らすの機嫌を養つた。かくて二日に亘る開所祝典の行事を過ぎ去り終つて、各教員は舊年の生産復興を目指して更に奮進をつづけようという快意をかためたのである。

部 外 活 動

一 著 稿 一

- ◇助教授 勝田高司「ダイグリダー分布曲線と煖房について」科學園 第4巻 第8號(8月號)
- ◇助教授 大島康次郎「天府時計の脱進機誤差について」精機學會誌 第15巻 第10號(10月號)

一 著 書 一

- ◇教授 渡邊要編「建築計畫の研究」第1輯(晝光照明)執筆 渡邊要、小木曾定彰、關原猛夫、142頁 200圖(富士出版株式會社 5月)
- ◇教授 渡邊要(齊藤竹生と共著)「雪と建築」154頁、140圖(彰國社 1月)

一 講 演 一

- ◇教授 高橋武雄「高粘性アルギン酸の製造法の研究」工業技術研究發表會(東大第一工學部で(昭和24年10月16日))
- ◇助教授 松下幸雄1、「スラッグの鹽基度に就いて」2、「熔融スラッグの電氣傳導度及び透電係數に就いて」日本鐵鋼協會第38回講演大會(日本製鐵八幡製鐵所に於いて、昭和24年10月5日)
- ◇教授 菊池眞一「蒸板に関する一二の實驗について」印刷學會(10月7日)
- ◇教授 星莖和「上の締固めについて」日本應用力學會

- 及び土木學會等の連合講演會(10月8日)
 - ◇助教授 三本五三郎「矢張りの水平抵抗測定による土の力學的性質の判定」日本應用力學會等の連合講演會(10月8日)
 - ◇教授 岡本壽三「アーチの撓屈について」日本應用力學會及び土木學會等の連合講演會(10月9日)
 - ◇助教授 久保慶三郎「附着應力の分布について」日本應用力學會及び土木學會等の連合講演會(10月9日)
 - ◇教授 菊池眞一「寫眞の現象について」工業技術研究發表會(10月16日)
 - ◇助教授 植村恒義 外前田秋夫(シチズン時計KK) 橋本順次(學生)「高速度カメラによる携帯時計脱進機構の研究」精密學會、時計學會、連合講演會(10月16日)
 - ◇助教授 大島康次郎「自動制御の最適條件について」講演精機學會會(昭和24年10月16日)
 - ◇助教授 大島康次郎「天府時計の脱進機誤差について」精機學會講演會(昭和24年10月16日)
 - ◇教授 渡邊要「寒地建築氣候區と窓の防寒性の評價」日本建築學會秋季學術講演(昭和24年10月)
 - ◇教授 渡邊要、助教授 勝田高司、助手 勝野邦夫。「ダイグリデートその應用」同上(講演者 勝田)
 - ◇教授 渡邊要、特研生 石井聖光「携帯用小型騒音計の試作」同上(講演者 石井)
 - ◇教授 久保田廣、講師 荒哲哉「寫眞機距離計の改良」工業技術研究發表會(昭和24年10月19日)
 - ◇助教授 小川岩雄、學生 辻泰「振動容量式電位計による金屬單極電位の絕對値の直接測定について」物性論分科會(京大に於いて 昭和24年10月22日)
- 一 款 稿 一
- ◇助教授 勝田高司「夏の住居」昭和24年8月1日婦人の時間

編 集 後 記

◇11月の開所式がすんでやれやれと思つている中、何時の間にか年の瀬もおしまつて、再び新しい年を迎えることになつた。1950年である

◇20世紀も丁度半ばを過ぎたわけだが、この半世紀における世界の科學技術の進歩をふりかへて見ると、その速ましくも偉大な數々の業績に驚異の眼をみはると共に、たゆまざり先人達の努力とその睿智とに心から敬服せざるを得ない。

◇電磁波の發見や原子構造の假説が今世紀初頭の話題であつたのが、今日では、Radar や Television は科學技術の最尖端をゆくものとなり、原子力工業の發達は原子力飛行機や潜水艦を生み出さんとしているのである。他の工業も亦しかりであろう。

◇しかしながらひるがへつて吾國の現状を顧みると、心の底から淋しさを禁じ得ない。吾國のすぐれた先

人達も、精魂を傾けて努力を盡されたのであり、吾々も亦渾身の力をふりしほつて研究に没頭しているのである。しかもなお吾々は努力の足らざるを歎かねばならないのか。

◇吾が祖國は立ち直らねばならぬ。あらゆる困難に打ち克つて祖國再建に邁進せねばならぬ。生産復興、これこそ當研究所の、吾々の、合言葉なのだ。

◇昨年夏もたけなわの7月6日、第1回編集委員會を開いてから回を重ねることすでに13回、10月1日に創刊號發行の運びとなり、以來發行は順調に、新たな年を迎えてここに第4號を世に贈ることとなつた。素人ばかりの編集委員も次第に要領がのみこめて來て、本年度は今迄の雜然たる編集から脱却し、もつと計畫的に時々特號號を交えて讀者への御便宜に供したい。

◇何卒讀者諸賢の一層の御鞭撻と御支援とを御願ひする。(Y.T.)

編 集 委 員

- 編集委員長 星 合 正 治
 - 編集委員 井 口 昌 平 (土木)
 - 鈴 木 弘 (機械)
 - 安 藤 良 夫 (船舶)
 - 齋 藤 成 文 (電氣)
 - 星 野 昌 一 (建築)
 - 石 井 義 郎 (應化)
 - 加 藤 正 夫 (冶金)
 - 小 川 正 義 (精密)
 - 富 永 五 郎 (物工)
 - 大 井 光 四 郎 (數力)
 - 島 飼 安 生 (應物)
 - 武 藤 義 一 (分析)
- 編集幹事 下村潤二郎
- 編集室 水野晴明
- 當番委員

表紙説明：開所式に展示した12坪の不燃性金屬組立住宅は、簡単なパネル構造で7人で3時間で骨格の組立が終る坪約2萬圓。(設計星野教授) [詳細は4月特號號に發表の豫定]

第2巻 第1號 生 産 研 究 定 價 60圓 (郵税 6圓)

1949年12月25日印刷 1950年1月1日發行

編 集 者 星 合 正 治
東大生産技術研究所
千葉市千葉局内彌生町
電話 千葉 366-370

印 刷 所 大 同 印 刷 株 式 會 社
東京都千代田區神田錦町 3-1

發 行 者 小 川 誠 一 郎

發 行 所 株 式 會 社 誠 文 堂 新 光 社
東京都千代田區神田錦町 1-5
電話 神田 (25) 2126-2129
發 行 所 東京 6294・6567

印 刷 者 井 關 好 章

盾 疑 応 答

質問 本造住宅の一部を防火的に改造したいと思いますが、壁の内部に貼って有効なものがあるでしょうか。(東京都世田ヶ谷区・市川三喜氏)

回答 内部を防火的に処理する簡単な方法は、難燃性の木毛セメント板を用いるか、更にこれに漆喰をぬるとよいのですが、これは室内からの発火に対しては有効で、壁と天井が難燃性になれば火事になる危険性は非常に少なくなります。この場合、建具の類ももちろん不燃材にするとか、せめて金属板で被覆する位のはしなければいけません。しかし、これでは他からの延焼を防ぐことはできません。完全な防火法としては独立した不燃材による骨格に、不燃材で外装及内装をやらなければなりません。これには當所で研究試作した金属パネル構造が好適で、木造の5割増の費用で防火的になります(建築・教授・星野昌一)

開所式記事

早朝來の時雨の去りやらぬ秋冷の11月12日當研究所の創立を祝う開所式典が舉行された。科學技術研究所の梓の結集されたこの日、集つた當所の職員並びに學生1000名、參會した來賓300名が、共々に心ゆくまで生研の創立の喜びを分かち合つたのである。午後2時中央大講堂に一同會して式典が始められた。所長式辭、總長挨拶に續き來賓數名交々立つて祝辭を述べて式を終る。

3時半から中央大會議室に於て、來賓、主催者が合して祝賀披露會が行われ、同時に各教室に於ても教職員學生一體となつてなごやかな祝賀の宴が開かれた。講堂裏側の一室及び各教室には本所の代表的研究成果が展示せられ一般の展覽に供されたが、各部の展示題目は下記の通りで合計四十八點、中でも建築教室提供の12坪金屬住宅は人目を引いた。開所披露行事は翌13日も引續いて

開所式展示研究事項一覽表

第1部 (基礎)	番號	展示題目	研究者名
	1	試作靜電型電子顯微鏡とこれによる撮影寫眞	谷 安正
	2	腦波記錄裝置	糸川 英夫
	3	油擴散ポンプの Jet における流れ	富永 五郎
	4	光電池の研究	江口 雅彦
	5	微分解析機	山内 恭彦 三井田 純一 渡邊 勝
	6	捩りの應力を石鹼膜の相似によつて測定する裝置	池田 健
	7	土の中の壓力を光電管を利用して測定する裝置	池田 健 富田 文治 森 大吉郎
	8	電氣捕鯨用電纜ロープの研究	平田 森三 鳥飼 安正
	9	捕鯨鉤の反跳防止裝置	平田 森三
	10	位相差顯微鏡	久保田 廣
	11	マグナス効果の風洞實驗	谷 一郎
第II部 (機械, 船舶)			
	1	齒車ポンプの研究	宮津 純
	2	逆張力引抜材の機械的性質	鈴木 弘
	3	耐蝕輕合金製救命艇の設計試作	山縣 昌夫
	4	波のある場合の境界層の剝離	田宮 眞
	5	蒸氣壓縮式蒸發裝置	兼重寬九郎
	6	空氣作動溫度制御裝置	高橋 安人
	7	暖房試驗室	藤 藤雄
	8	木材の蒸氣爆碎に關する研究	桑井 源禎
	9	芋澱粉工業の技術設備の研究	佐藤 敬夫
	10	精密ねじ切りに關する研究	小川 正義
	11	時計の性能に關する研究	大島康次郎 柴田 耕次
第III部 (電氣)			
	1	變壓器燒損防止器と電流制限器	瀨藤 象二 潮 恒郎
	2	ビラス回路を應用した微少容量變化検出裝置	星合 正治 野村 民也
	3	車輛用電力ヒューズ	福田 節雄
	4	送電線閃絡點標定器	藤高周平・麻生忠雄 藤井新兵衛
	5	時計歩度の電氣的測定裝置	高木 昇
	6	高周波加熱による成型合板加工	齋藤 成文
	7	超音波探傷器	丹羽 登雄
	8	増幅器過渡特性直視裝置	森脇 義雄 内野 俊治
第IV部 (化學, 冶金)			
	1	油脂・蛋白質の生産並びに應用研究	増野實・淺原照三・金武克己・櫻内正・高木行雄・物瀬文之・その他研究生一同
	2	銀イオン濃度計	菊池眞一・坂口喜學・野崎弘
	3	製鹽副産物の利用に關する研究	岡 宗次郎
	4	アルギン酸に關する研究	高橋 武雄
	5	純銅粉の製造	小川 芳樹
	6	製鋼反應の研究	松下幸雄・坂下六郎・森一美・鹽見純雄
	7	電解による純鐵粉の製造	原 善四郎
	8	迅速工業分析法の研究	武藤 義一
	9	酸素製鐵の豫備實驗	金森九郎・八塚健夫・長井保一
	10	鹽化マグネシウムの製造に關する研究	江上 一郎 田村 啓治 片山 忠三
	11	眞空熔解法の研究	一色貞文・鍋木俊郎・古茂田敬一
第V部 (構 築)			
	1	木コンクリートゲタの試作研究	福田 武雄 久保慶三郎
	2	建造物の基礎地盤調査	星 莖 和 三木五三郎
	3	地上寫眞測量と其應用に關する研究	丸安 隆和
	4	金屬住宅の試作	星野昌一・坪井善勝
	5	鐵筋コンクリート版の應剪抵抗	坪井 善勝
	6	本邦等デイグリーデー線圖と暖房	勝田 高司
	7	強化波型スレート板の試作と應用	田中 一彦 池邊 陽

行われ、特にこの日は卒業教員員の公務遂行の爲の盛の功勞者として、その家業が維持され各教員で暮らすの機轉を授けた。かくて二日に亘る開所祝典の行事を過ぎ去り終えて、各教員は舊年の生産復興を目指して更に奮進をつづけようという快意をかためたのである。

部 外 活 動

一 著 稿 一

- ◇助教授 勝田高司「ダイグリダー分布曲線と煖房について」科學園 第4巻 第8號 (8月號)
- ◇助教授 大島康次郎「天府時計の脱進機誤差について」精機學會誌 第15巻 第10號 (10月號)

一 著 書 一

- ◇教授 渡邊要編「建築計畫の研究」第1輯(晝光照明)執筆 渡邊要、小木曾定彰、關原猛夫、142頁 200圖(富士出版株式會社 5月)
- ◇教授 渡邊要(齊藤竹生と共に著)「雪と建築」154頁、140圖(彰國社 1月)

一 講 演 一

- ◇教授 高橋武雄「高粘性アルギン酸の製造法の研究」工業技術研究發表會(東大第一工學部で昭和24年10月16日)
- ◇助教授 松下幸雄1、「スラッグの鹽基度に着いて」2、「熔融スラッグの電氣傳導度及び透電係數に着いて」日本鐵鋼協會第38回講演大會(日本製鐵八幡製鐵所に於いて、昭和24年10月5日)
- ◇教授 菊池眞一「蒸板に関する一〇の實驗について」印刷學會(10月7日)
- ◇教授 星莖和「上の締固めについて」日本應用力學會

- 及び土木學會等の連合講演會(10月8日)
 - ◇助教授 三本五三郎「矢張りの水平抵抗測定による土の力學的性質の判定」日本應用力學會等の連合講演會(10月8日)
 - ◇教授 岡本壽三「アーチの撓屈について」日本應用力學會及び土木學會等の連合講演會(10月9日)
 - ◇助教授 久保慶三郎「附着應力の分布について」日本應用力學會及び土木學會等の連合講演會(10月9日)
 - ◇教授 菊池眞一「寫眞の現象について」工業技術研究講演會(10月16日)
 - ◇助教授 植村恒義 外前田秋夫(シチズン時計KK) 橋本順次(學生)「高速度カメラによる携帯時計脱進機構の研究」精密學會、時計學會、連合講演會(10月16日)
 - ◇助教授 大島康次郎「自動制御の最適條件について」講演精機學會會(昭和24年10月16日)
 - ◇助教授 大島康次郎「天府時計の脱進機誤差について」精機學會講演會(昭和24年10月16日)
 - ◇教授 渡邊要「寒地建築氣候區と窓の防寒性の評價」日本建築學會秋季學術講演(昭和24年10月)
 - ◇教授 渡邊要、助教授 勝田高司、助手 勝野邦夫。「ダイグリデートその應用」同上(講演者 勝田)
 - ◇教授 渡邊要、特研生 石井聖光「携帯用小型騒音計の試作」同上(講演者 石井)
 - ◇教授 久保田廣、講師 荒哲哉「寫眞機距離計の改良」工業技術研究發表會(昭和24年10月19日)
 - ◇助教授 小川岩雄、學生 辻泰「振動容量式電位計による金屬單極電位の絕對値の直接測定について」物性論分科會(京大に於いて 昭和24年10月22日)
- 一 款 稿 一
- ◇助教授 勝田高司「夏の住居」昭和24年8月1日婦人の時間

編 集 後 記

◇11月の開所式がすんでやれやれと思つている中、何時の間に今年の瀬もおしまつて、再び新しい年を迎えることになつた。1950年である

◇20世紀も丁度半ばを過ぎたわけだが、この半世紀における世界の科學技術の進歩をふりかへて見ると、その速ましくも偉大な數々の業績に驚異の眼をみはると共に、たゆまざり先人達の努力とその睿智とに心から敬服せざるを得ない。

◇電磁波の發見や原子構造の假説が今世紀初頭の話題であつたのが、今日では; Radar や Television は科學技術の最尖端をゆくものとなり、原子力工業の發達は原子力飛行機や潜水艦を生み出さんとしているのである。他の工業も亦しかりであろう。

◇しかしながらひるがへつて吾國の現状を顧みると、心の底から淋しさを禁じ得ない。吾國のすぐれた先

人達も、精魂を傾けて努力を盡されたのであり、吾々も亦渾身の力をふりしほつて研究に没頭しているのである。しかもなお吾々は努力の足らざるを歎かねばならないのか。

◇吾が祖國は立ち直らねばならぬ。あらゆる困難に打ち克つて祖國再建に邁進せねばならぬ。生産復興、これこそ當研究所の、吾々の、合言葉なのだ。

◇昨年夏もたけなわの7月6日、第1回編集委員會を開いてから回を重ねることすでに13回、10月1日に創刊號發行の運びとなり、以來發行は順調に、新たな年を迎えてここに第4號を世に贈ることとなつた。素人ばかりの編集委員も次第に要領がのみこめて來て、本年度は今迄の雜然たる編集から脱却し、もつと計畫的に時々特號號を交えて讀者への御便宜に供したい。

◇何卒讀者諸賢の一層の御鞭撻と御支援とを御願ひする。(Y.T.)

編 集 委 員

- 編集委員長 星 合 正 治
 - 編集委員 井 口 昌 平 (土木)
 - 鈴 木 弘 (機械)
 - 安 藤 良 夫 (船舶)
 - 齋 藤 成 文 (電氣)
 - 星 野 昌 一 (建築)
 - 石 井 義 郎 (應化)
 - 加 藤 正 夫 (冶金)
 - 小 川 正 義 (精密)
 - 富 永 五 郎 (物工)
 - 大 井 光 四 郎 (數力)
 - 鳥 飼 安 生 (應物)
 - 武 藤 義 一 (分析)
- 編集幹事 下村潤二郎
- 編集室 水野晴明
- 當番委員

表紙説明: 開所式に展示した12坪の不燃性金屬組立住宅は、簡単なパネル構造で7人で3時間で骨格の組立が終る坪約2萬圓。(設計星野教授) [詳細は4月特號號に發表の豫定]

第2巻 第1號 生 産 研 究 定 價 60圓 (郵税 6圓)

1949年12月25日印刷 1950年1月1日發行

編 集 者 星 合 正 治
東大生産技術研究所
千葉市千葉局内彌生町
電話 千葉 366-370

印 刷 所 大 同 印 刷 株 式 會 社
東京都千代田區神田錦町 3-1

發 行 者 小 川 誠 一 郎
株 式 會 社 誠 文 堂 新 光 社
東京都千代田區神田錦町 1-5
電話 神田 (25) 2126-2129
發 行 所 東京 6294・6567

印 刷 者 井 關 好 章

行われ、特にこの日は卒業教員員の公務遂行の爲の盛の功勞者として、その家業が維持され各教員で暮らすの機轉を授けた。かくて二日に亘る開所祝典の行事を過ぎ去り終えて、各教員は舊年の生産復興を目指して更に奮進をつづけようという快意をかためたのである。

部 外 活 動

一 著 稿 一

- ◇助教授 勝田高司「ディグリデー分布曲線と煖房について」科學園 第4巻 第8號 (8月號)
- ◇助教授 大島康次郎「天府時計の脱進機誤差について」精機學會誌 第15巻 第10號 (10月號)

一 著 書 一

- ◇教授 渡邊要編「建築計畫の研究」第1輯(晝光照明)執筆 渡邊要、小木曾定彰、關原猛夫、142頁 200圖 (富士出版株式會社 5月)
- ◇教授 渡邊要(齊藤竹生と共に著)「雪と建築」154頁、140圖 (彰國社 1月)

一 講 演 一

- ◇教授 高橋武雄「高粘性アルギン酸の製造法の研究」工業技術研究發表會(東大第一工學部で(昭和24年10月16日))
- ◇助教授 松下幸雄1、「スラッグの鹽基度に着いて」2、「熔融スラッグの電氣傳導度及び透電係數に着いて」日本鐵鋼協會第38回講演大會(日本製鐵八幡製鐵所に於いて、昭和24年10月5日)
- ◇教授 菊池眞一「蒸板に関する一二の實驗について」印刷學會(10月7日)
- ◇教授 星莖和「上の締固めについて」日本應用力學會

- 及び土木學會等の連合講演會(10月8日)
 - ◇助教授 三本五三郎「矢張りの水平抵抗測定による土の力學的性質の判定」日本應用力學會等の連合講演會(10月8日)
 - ◇教授 岡本壽三「アーチの撓屈について」日本應用力學會及び土木學會等の連合講演會(10月9日)
 - ◇助教授 久保慶三郎「附着應力の分布について」日本應用力學會及び土木學會等の連合講演會(10月9日)
 - ◇教授 菊池眞一「寫眞の現象について」工業技術研究發表會(10月16日)
 - ◇助教授 植村恒義 外前田秋夫(シチズン時計KK) 橋本順次(學生)「高速度カメラによる携帯時計脱進機構の研究」精密學會、時計學會、連合講演會(10月16日)
 - ◇助教授 大島康次郎「自動制御の最適條件について」講演精機學會會(昭和24年10月16日)
 - ◇助教授 大島康次郎「天府時計の脱進機誤差について」精機學會講演會(昭和24年10月16日)
 - ◇教授 渡邊要「寒地建築氣候區と窓の防寒性の評價」日本建築學會秋季學術講演(昭和24年10月)
 - ◇教授 渡邊要、助教授 勝田高司、助手 勝野邦夫。「ディグリデートその應用」同上(講演者 勝田)
 - ◇教授 渡邊要、特研生 石井聖光「携帯用小型騒音計の試作」同上(講演者 石井)
 - ◇教授 久保田廣、講師 荒哲哉「寫眞機距離計の改良」工業技術研究發表會(昭和24年10月19日)
 - ◇助教授 小川岩雄、學生 辻泰「振動容量式電位計による金屬單極電位の絕對値の直接測定について」物性論分科會(京大に於いて 昭和24年10月22日)
- 一 款 稿 一
- ◇助教授 勝田高司「夏の住居」昭和24年8月1日婦人の時間

編 集 後 記

◇11月の開所式がすんでやれやれと思つている中、何時の間に今年の瀬もおしまつて、再び新しい年を迎えることになつた。1950年である

◇20世紀も丁度半ばを過ぎたわけだが、この半世紀における世界の科學技術の進歩をふりかへて見ると、その遅ましくも偉大な數々の業績に驚異の眼をみはると共に、たゆまざり先人達の努力とその睿智とに心から敬服せざるを得ない。

◇電磁波の發見や原子構造の假説が今世紀初頭の話題であつたのが、今日では、Radar や Television は科學技術の最尖端をゆくものとなり、原子力工業の發達は原子力飛行機や潜水艦を生み出さんとしているのである。他の工業も亦しかりであろう。

◇しかしながらひるがへつて吾國の現状を顧みると、心の底から淋しさを禁じ得ない。吾國のすぐれた先

人達も、精魂を傾けて努力を盡されたのであり、吾々も亦渾身の力をふりしほつて研究に没頭しているのである。しかもなお吾々は努力の足らざるを歎かねばならないのか。

◇吾が祖國は立ち直らねばならぬ。あらゆる困難に打ち克つて祖國再建に邁進せねばならぬ。生産復興、これこそ當研究所の、吾々の、合言葉なのだ。

◇昨年夏もたけなわの7月6日、第1回編集委員會を開いてから回を重ねることすでに13回、10月1日に創刊號發行の運びとなり、以來發行は順調に、新たな年を迎えてここに第4號を世に贈ることとなつた。素人ばかりの編集委員も次第に要領がのみこめて來て、本年度は今迄の雜然たる編集から脱却し、もつと計畫的に時々特號號を交えて讀者への御便宜に供したい。

◇何卒讀者諸賢の一層の御鞭撻と御支援とを御願ひする。(Y.T.)

編 集 委 員

- 編集委員長 星 合 正 治
- 編集委員 井 口 昌 平 (土木)
- 鈴 木 弘 (機械)
- 安 藤 良 夫 (船舶)
- 齋 藤 成 文 (電氣)
- 星 野 昌 一 (建築)
- 石 井 義 郎 (應化)
- 加 藤 正 夫 (冶金)
- 小 川 正 義 (精密)
- 富 永 五 郎 (物工)
- 大 井 光 四 郎 (數力)
- 島 飼 安 生 (應物)
- 武 藤 義 一 (分析)
- 編集幹事 下 村 潤 二 朗
- 編 集 室 水 野 晴 明
- 當 番 委 員

表紙説明：開所式に展示した12坪の不燃性金屬組立住宅は、簡単なパネル構造で7人で3時間で骨格の組立が終る坪約2萬圓。(設計星野教授) [詳細は4月特號號に發表の豫定]

第2巻 第1號 生 産 研 究 定 價 60圓 (郵税 6圓)

1949年12月25日印刷 1950年1月1日發行

編 集 者 星 合 正 治
東大生産技術研究所
 千葉市千葉局内彌生町
 電話 千葉 366-370

印 刷 所 大 同 印 刷 株 式 會 社
東京都千代田區神田錦町 3-1

發 行 者 小 川 誠 一 郎
株式會社 誠 文 堂 新 光 社
 東京都千代田區神田錦町 1-5
 電話 神田 (25) 2126-2129
 發 行 部 電 話 6294・6567

印 刷 者 井 關 好 章